



VR旅行 お年寄りの窓に

横浜の元介護職員が活動

VR(仮想現実)の技術を使い、外出が難しいお年寄りに、思い出の地や観光地を巡る「仮想旅行」を体験してもらう活動が始まっている。横浜市の元介護職員、登嶋健太さん(31)が振りを始めた。各地の映像に加え、今夏からは全国の元気な高齢者にカメラマンをお願いし、より多くの映像を集める。

「海がすい〜く透き通っている」「きれいなえ」。視線の先に沖縄の海岸が映っていた。映像を楽しんでいたのは、沖縄県から約1600キロ離れた埼玉県吉川市の有料老人ホーム「ラフェスタ吉川美南」の斎藤正子さん(90)。スマートフォンに専用のゴーグルを取り付けたVR機器を使い、360度の景色を楽しんだ。斎藤さんは自力で歩けるが、1人での外出は難しい。「10年前、家族と沖縄に行つたのを思い出した。若いころは故郷の瀬戸内海を泳いでいたのよ」と昔を懐かしんだ。

柔道整復師の資格を持つ登嶋さんは、デイサービスでリハビリ担当の介護職員だった。利用者から「思い出の場所に行きたい」という声を多く聞いた。4年前、専用ゴーグルで手軽にVR映像を楽しめることを知り、リハビリに取り入れた。ある女性は、亡き夫と旅行で訪れた和歌山県内の滝の映像を見て涙を浮かべた。「これが外とつながる『窓』になるかもしれない」。約1年後に退職し、活動に専念した。

定年後に夫婦で行った思い出のイタリアのフィレンツェ、ふるさとの青森県・十和田湖……。以前の勤め先や自身のホームページで「仮想旅行」の依頼を受け、映像を撮るための費用はクラウドファンディングで募った。集めた映像は世界28カ国、国内27都道府県、約250本。体験し

「思い出の場所に行きたい」実現

撮影もシニアに

一方で、1人で素材を集める限界も感じ始めた。そこで、全国の元気なお年寄りに、地元の映像を撮ってもらい、その映像で依頼者に「旅行」を楽しんでもらう……。そんな構想を描いた。地域に詳しい地元の人が撮影すれば、深みのある映像が撮れる。

昨年11月からはインターネットでの社会交流に関心の高いシニア組織向けに、360度の撮影ができるカメラの使用方を講座を始めた。まず100人単位の「カメラマン」養成と、約100カ所の依頼を募集。今夏から実際に撮影してもらう予定だ。機材購入費などはクラウドファンディングや企業の協賛で集める。

登嶋さんは、この活動を事業化し、撮影者に謝礼を払うことも目標にする。「仮想旅行」の映像を依頼する人が料金を払い、高齢者カメラマンが撮影することで雇用創出にもつなげたいと考えた。「外出困難な高齢者と元気な高齢者の『セカンドライフ』をVRでつなぎたい」と話す。

(山本泰介)

悪質と

アメリカカンファレンス(6日、東京)の守備選手が関に悪質なタックルに傷させた問題で、側が大阪府警に訴えたことが21日、被害選手とそから謝罪を受け父親は「日大選であのようなブのかの説明がな指示があった(が)話されなかつた」と話した。

